

◆ 第4回 世界遺産登録推進のための意見交換会 ◆

足元の文化財を守り伝えること、世界遺産に登録すること

7月15日(金)、市役所第3分庁舎講堂において、第4回意見交換会が開かれました。荒井章さん(意見交換事業実行委員長)の司会で内海恒雄さん(広報部会長)の世界遺産登録に向けての見通しや推進協議会の趣旨についての説明、今田正廣さん(鎌倉地区自治組織連合会会長)・小松原利一さん(材木座地区代表)・伊藤武子さん(同)・石渡雅彦さん(長谷自治会会長)・加藤邦明さん(同副会長)などの招待者を中心に、鎌倉地区の祭事・行事の取り組みや鎌倉同人会・風致保存会の活動などの発表があり、それをもとに様々な課題や対策が話し合われました。

以下発表内容や交された意見を要約して紹介します。

■ 周囲の山を取り込んだ世界遺産候補

世界遺産登録に向けての今後の日程は、9月をメドに仮推薦書の作成、続いて正式な推薦書の提出、イコモスによる審査へと進み、早ければ平成25年の決定となる。鎌倉の世界遺産候補は、21の社寺や遺跡と古都保存法の六条で保護されている山林などと一体化した、歴史的景観としての広がりをもった文化財である。このような文化財の捉え方はこれまでにない画期的なものである。

■ 鎌倉地区の活動

材木座地区はかつて水戸光圀の『鎌倉日記』に記されているように貧しい漁村であった。漁業は今日まで受け継がれており、正月2日の汐まつりは漁協の主催である。その他どんど焼き・稲荷講(初午)・火伏の神を祭る秋葉山三尺坊大権現例大祭・五所神社例大祭・光明寺お十夜法要などがあるが、時代とともに祭を司る人や祭られる側にも変遷があって、今後とも様々な課題が派生すると思われる。また和賀江嶋とたぶの木公園の清掃、和賀江嶋の倒れた石碑の復元を行政に要請するなどの活動を行っている。近年マリンスポーツが盛んで、地元の行事などにも協力的な若者がでるなど町の活性化につながると考えられる。

長谷地区には四つの寺があって、門前町として発展してきた。7人の世話人と商店街の人たちが守る甘縄神明社の例大祭・どんど焼き、漁協と坂ノ下地区合同で催す舟おろしの行事・御霊神社の面掛行列などがある。

関東大震災後に大町から分離した由比ガ浜地区の祭は、戦前は大町の八雲神社の祭であったが、現在は明治20創祀の葛原岡神社の6月大祭である。

■ 鎌倉同人会・風致保存会その他市民団体の活動

鎌倉の街は明治22年横須賀線が開通してから、海水浴が盛んになり、別荘地として発展してきたが、鎌倉にふさわしいまちづくりをめざして、明治の元勳陸奥宗光の子息陸奥広吉の主導によって大正4年に鎌倉同人会が設立され、関東大震災後に鎌倉国宝館を造るなど文化財保護に重要な役割を果たしてきた。戦後では昭和59年の、ウォーナー博士の孫の来日を機に、鎌倉駅西口に博士の記念碑を設立。博士は太平洋戦争の折に京都・奈良・鎌倉を戦禍から守るよう連合軍に働きかけたといわれる。

昭和39年に発足した鎌倉風致保存会は世界遺産登録に向けての活動を重ねてきた。地下道ギャラリー展示・大佛茶亭公開・緑と歴史探訪(共催)・お話しサロンなど様々な市民活動を行っている。保存会の目標は歴史的景観の保全という世界遺産登録の理念と一致している。

源頼朝会では月に一度の頼朝墓の清掃 歴史の勉強、正月三が日に白旗神社への奉仕などを実施している。鎌倉の世界遺産登録を目指す市民の会では、鎌倉の世界遺産登録を論じる連続シンポジウムを重ねてきている。

■ 今後の課題

世界遺産登録への関心が必ずしも高いとはいえず、世界遺産になることでどのような利点があるのか、あるいはどのような制約があるのかという不安や疑問が依然として市民の間にある。足元の文化財を大切にするという地道な活動や意識と、「武家の古都・鎌倉」という理念をどのようにつなげるのか、祭などに協力することが世界遺産に通じるという考え方を端的に表現するキーワードが必要である。

世界遺産になったことで、平泉を東北再興の決め手にしようという意識が地元に出てきたが、鎌倉においても世界遺産登録をまちづくりに生かしていくことが重要である。玉縄地区には玉縄歴史資料館があり、それを整備する過程でさまざまな発見があった。博物館を造ることもまちづくりに通じるのではない。御成小の講堂を仮の博物館とするのも一案である。足元の文化財を見直して鎌倉の真の良さを知り、鎌倉が何をめざすべきかを追及することが、文化財を破壊する開発の抑止力となり、質の高い観光地としての鎌倉の発展、世界遺産にふさわしいまちづくりにつながるのではなかろうか。